

2015年、飯豊山地のカイラギ沢（山形県小国町）においてホシミスジの生息を確認したので、その生息環境について報告する。また、飯豊山地の草原性蝶類について、吾妻山地と比較しながらその特徴を概説した。

観察記録

カイラギ沢は上流にむかって左から滝沢、右から梶川を合流して急崖となり、特に流紋岩地帯である「赤滝のへつり」付近では登山路は段差を求めて大きく迂回する（図1）。ホシミスジの生息地は、まさにこの急崖である。

図1



7月4日、翌日の飯豊連峰山開きのため、筆者の所属する小国山岳会の有志で、カイラギ沢を石コロビ沢の出合まで刈り払い、ロープを張り直した。「赤滝のへつり」でも3箇所ほどロープを張ったが、一番奥の840m地点でミスジチョウの一種を目撃した。その時点で咲いていたシモツケに訪花したが、産卵行動はみられなかった。下の川の方にむかって崖を降下して姿を消した後、数分後また戻ってきて岩に静止した。カメラを持っていなかったため確認できなかったものの、飛び方や大きさから、ミスジチョウやコミスジではなく、本種である可能性が高いと思われた。

7月31日、ダイグラ尾根の刈り払いのため石コロビ沢経由で飯豊に入山した。11時57分、前述の840m地点に着いた時、前回と同じように占有行動を繰り返すミスジチョウの仲間がいて撮影でき、やはりホシミスジであることが確認できた（図2、3）。図4手前のシモツケは花期の終わりとなり訪花することはなかったが、シモツケのすぐそばの岩に好んで静止した。

図2



図3



この後も数回現地を通過したが、以後本種の姿は確認できず、このシモツケ上では幼虫は発見できなかった。

8月16日には小屋番のため飯豊町の大日杉口より御西小屋をめざした。地蔵岳(1539m)を過ぎ、目洗い清水までの間の1445m地点で、ミスジチョウの一種が東(飯豊町)側より上ってきて、低木に一旦止まった。カメラを取り出している間に東の谷へと戻っていった。

考察

山形県内では市街地の植栽種(コデマリ、ユキヤナギ)で発生が知られていた本種が、小国町の片洞門の崖地に自生するシモツケで発見された(横倉, 1982, [横倉, 2007ではアイズシモツケと記しているが初出のシモツケが正しいと思われる])。本木(2008)も朝日村大鳥原林道、小国町玉川中里などの産地を記録しているが、周辺の植栽発生地からの距離などの情報が不明であり、確実な自然状態での発生地の新たな記録は、同じ小国町の明沢川沿いの崖地で発表され(岩野, 2008, [ただし観察年は1988年])、食草はやはりシモツケであった。

一方、武田(2011)は飯豊町岳谷で同町初記録となる本種を、付近に人家のない林道で得ている。今回地蔵岳近くの稜線でミスジチョウの一種が目撃された地点は、武田の採集地点と比較的近く、稜線下は雪崩斜面が発達しており、シモツケもカイラギ沢のように自生している可能性が高い。これらのことから、8月16日に目撃されたものもホシミスジである可能性が高い。

大高(2012)は本種の山形県における高所記録として、米沢市白布高湯の900m、鶴岡市大鳥池の1000mなどを紹介しているが、白布高湯は旅館の植栽種での発生の可能性が高い。カイラギ沢の840mの記録はこれらに次ぐものであり、地蔵岳付近で目撃されたものがホシミスジとすれば、これらを上回るものなる(ただしもし本種だとしても占有行動のため稜線にやってきたものと思われる、発生地自体はより標高の低い斜面にあると思われる)。

ほぼ同緯度上にある飯豊山地と飯森山(梅峰山塊)及び吾妻山地について、各山体の規模、標高、植生を示した模式図を図5に示した。アオモリトドマツを欠き、コメツガの分布もクサイグラとダイグラの二つの尾根のみに限られる飯豊山地では、豪雪と雪崩という現在の環境、2回にわたる雪崩涵養型の氷河の発達(長谷川, 2004)という過去の環境が草原環境を発達させた。その結果、高山蝶ベニヒカゲが豊産(草刈, 投稿中)し、オオゴマシジミ(草刈,)やヘリグロチャバネセセリとコジャノメ(草刈・高橋, 2013)なども高標高の特殊な環境に生息している。そして今回、コジャノメと同様な流紋岩地帯の崩壊斜面という環境にホシミスジの生息地が確認された。ホシミスジの食草は草本ではないものの、アバランチシェルト地形の斜面草原地帯に自生する低木のシモツケに依存している。

吾妻山地には以上の5種のうち、自然状態ではオオゴマシジミのみが生息するが、飯豊山地のような雪崩斜面では少なく、爆裂火口跡や岩塊斜面といった火山性の特殊な環境が作り出した草原環境に依存している。また中間の飯森山(梅峰山塊)では、飯豊山地に準ずる豪雪地帯のため、雪崩植生が部分的に発達し、オオゴマシジミの発生地が発見されているほか、飯豊山地との境界付近の白川上流部でコジャノメも目撃されている(草刈, 2014)。ホシミスジが採集された飯豊町岳谷も飯豊山地と梅峰山塊の中間に近く、調査が進めば梅峰山塊中心部でもホシミスジやコジャノメの生息地が見つかる可能性があり、調査が望まれる。

- 岩野秀俊（2008）山形県を含む東北地方におけるホシミスジの記録 出羽のむし 4:36-37.
- 大高 力（2012）山形県の高標高での蝶の記録 出羽のむし 8:76-81.
- 草刈広一・高橋真弓（2013）飯豊山地の雪崩地形に生息するコジャノメについて（予報）
- 草刈広一（2014）飯豊カイラギ山小屋昆虫記 2014 出羽のむし 10:73-82.
- （投稿中）飯豊山地におけるベニヒカゲの生態的知見 越佐昆虫同好会会報
- 武田典雄（2011）飯豊町でホシミスジを採集 出羽のむし 7:80.
- 長谷川裕彦（2004）第1部自然 佐藤宏之編 小国マタギ共生の民俗知 農文協
286pp:23-60.
- 本木俊一（2008）山形県におけるタテハチョウ科の採集記録（2006年まで）出羽のむし
4:21-27.
- 横倉 明（1982）蝶類の採集記録 山形昆虫同好会会誌 11:19.
- （2007）ホシミスジ特集を計画 虫の友 13:2.